

落葉を踏むリズムを持った足音、時折り枯れ木を踏み  
したく音を混じえて、

風にさやく葉ずれの音、時折り樹間に小鳥の声も合わ  
せて、

溪流のささやきと滝のとどろき、

朝もやの中の小鳥のコーラス、

はては、月光の中にすたく虫の音……

よくぞ人に生まれけるとの心の躍動と共に、この世の  
の生きとし生けるもの総てが、安らぎと喜びを温存し  
ている様に感じるのである。

私と鳥との出会いは、三才の時、利根川の近く（現在  
の桜川村結佐）に住んでいた頃を初めとするが、心から  
野鳥に親しみ、愛着を感じる様になったのは、十年程前  
の体験からのことである。

子供の頃（小学生）は、現在の子と違って自然物利用  
の工夫した遊びが主で、その中でも動物相手は、知恵く  
らべのスキルがあつてとても楽しかった。鳥に関しては、  
麦畑でヒバリの巣を探すのに、親が巣に戻る時は離れた  
場所に降り、歩いて行くとか、比較的遠端に営巣すると

かを体験より得て見つけ出したり、今は禁止されている  
が、「トリモチ」を使った「ハゴ」とか「落とし籠」ま  
たは篠棒とタコ糸を使った「ワナ」（首をはさむので、  
ブッチメと呼んでいた）などで、飼うことよりは捕える  
ことに興味があり、生かすことはしなかった。稀には可  
愛想になつて逃がすことはあつたが、傷ついた小鳥は必  
ずといつてよい位に死んだ。いまにして思えば憐れにも  
残酷な話であるが、当時はそれ程、ヒバリ、スズメ、コ  
カ、ワラヒワ、マヒワ、アオジ、メジロ、ウグイス、ホ  
オジロ、ヤマガラ、エナガ、シジュウガラなどの小鳥が  
たくさんいた。中型のキジバト、フクロウ（今は滅多に  
見られない）コゲラ、アカゲラ（キツツキ科でいまは筑  
波山の様なところでしか見られない）なども人家の裏山  
に住んでいた。風呂の水汲みに取上げポンプ（ガッチン  
ポンプと呼んでいた）の音が手動で鳴ると裏山のキジバ  
トがデデッポッポウと相づちを打つたことは、いまの子  
供達に話しても想像がつかないらしい。いまは、当時  
と比べると畑が少なくなり、山林の中に自動車道や宅地  
を造成して、鳥の飼料と住み家を奪ってしまい、さらに